



令和6年9月19日

研修だより 34号

## 山名小学校研修会（4の4参観授業）

小笠原康晃

### 1 4の4（青山先生）国語「忘れ物、ぼくは川」

昨年度、田村学先生の事後指導でも取り上げられた授業をした青山智士先生の授業を参観しました。

#### （1）特別支援が必要な子への配慮

##### ①教科書を提示する

教科書を開き、開いているページを見せながら「教科書○ページを開きます。」と笑顔で子どもたちに指示をされていました。

音声による情報と視覚による情報の2つを同時に提示していました。

聴覚優位の子は先生の発言で、視覚優位の子は提示された教科書を見ながら、ページを開いていました。

##### ②「とっても困る人、いますか。」

情報端末を活用した授業だったため、子どもたちのバッテリーの残り割合を確認していました。

一通り、残りの割合を聞いた後で、「とっても困る人、いますか」と聞いていました。

「少し困る人」でも「困る人」でもありません。

とっても困る人です。「充電が残り数%しかない」は「とっても困る」に入ります。

しかし、「充電残り20%」は「とっても困る」には入りません。

子どもたちが自分たちの状況をしっかり把握していることに驚きました。

そして、そのことを踏まえた指示だったのだと感じました。

##### ③起きうるトラブルを予想する

情報端末を活用しようとしたら、忘れていた子供がいた。

充電がない子供がいた。

よくあることです。

しかし、そのことを想定した声掛けをしていました。

貸出用の端末や充電器を準備していました。

スタート地点を揃えて、全員が授業に参加できるようにしていました。

#### ④指示と確認を細かくする

「教科書、出した人？」

「隣の人と確認をなささい」

一つの指示に対して、必ず確認をしていました。

お隣同士で確認をする。

手を上げさせる。

教師が一人一人チェックする。

様々な方法がありました。

こうすることで、子供たちも「やらないとまずい」という気持ちになり、授業への参加に繋がります。

#### ⑤言葉の定義を明確にする

「気持ちを込めて読むことを「朗読」と言います。」

「間違えずにスラスラ読むことを「音読」と言います。」

学習用語の定義を確認していました。

1回の確認だけでは、子供たちに定着しません。

この授業だけでなく、何度も何度も確認していたと感じました。

教科の学習において、「教科の言葉」は必ず出てきます。

今年の全国学調でも「引用」や「要旨」といった、「国語の言葉」が問題文の中に出てきました。

このような言葉をしっかりと覚えさせるのも大切だと思いました。

#### ⑥授業のゴールを明確にする

ループリックを示すことで、授業のゴールが明確になります。

ループリックシートを使って、子供たちは自分たちが目指すゴールの姿を洗濯していました。

今回は「音読」によるゴールでしたので、「スラスラと読める」「抑揚をつけて読める」の2つがゴールの基準になっていました。

## (2) ICT の活用

### ①ループリックによる目標設定と自己評価 (別紙資料)

ループリックシートを活用することで、一人一人が授業の目標を設定していました。

AA、A、B と三段階の目標になっていました。

授業の終わりには、自己評価をして、どこまで達成できたかを評価していました。

### ②「学びに向かう態度」を評価する (別紙資料)

今回の授業では、「学びに向かう態度」の自己評価をしていました。

+ (プラス) チャートを使った自己評価で、私も初めて見ました。

ふりかえりを書くときにも、そのツールが生かされていました。

### ③個別最適な学習

ループリックには様々な基準が示されていました。例えば「スラスラ読めるように、自分で10回読むことができたならA評価」「先生や友達にスラスラ読めているか聞いてもらって、合格だったらA評価」などです。

ゴールとなる規準が具体的で明確になっており、子どもだけでも取り組める内容になっています。

今回の授業が「詩の音読」という授業だったから、より具体的だったと思います。

すると、一人一人の子が個別に学習をすることができます。

私が参観した目の前に、マスクを付けた女の子がいました。

教科書を開いたまま、じっとしていて、ずっと席に座っていました。

他の子が友達同士で音読の確認をしたり、先生にチェックをしてもらったりする中で、一人だけ静かにしていました。

その子をじっと観察していました。

10分くらい経ったある時、不意に立ち上がり、先生のところへ行き、音読チェックを受けていました。

合格をもらったらしく、嬉しそうな表情で席に戻ってきました。

そのとき、「あ、この子はマスクをしていて分からなかったけど、小さな声で音読の練習をしていたんだ。それで自信がついたから、音読チェックに言ったんだ。」と理解しました。

賑やかで元気な子だけでなく、静かで大人しい子も自分に合わせて練習できる方法が、ループリックとして示されていたんだと納得しました。

### ④協働的な学習

黒板前に集まった男子たち。

お互いに音読チェックをしていました。

一人に確認してもらったら、次の友達、というように、集団で活動しています。

関わり合いが自然と生まれていました。

「個別最適な学習」と「協働的な学習」が教室の中に存在していました。

どちらか一方だけではなく、両立している様子でした。

## (3) ベーシックスキル

### ①目線

常に子どもの方を見ていました。模範で音読するときも、教科書に目をやりますが、必ず子どもの方に戻っていました。

しかも、教室全体を見ている様子でした。

いつも子どもの方を見ていることで、子どもの様子、子どもの頑張り、子どものつまづきを感じ取っていると思いました。

## ②表情

### 45分間ずっと笑顔でした。

驚いた表情や真剣な表情の時もありましたが、基本的に笑顔。

常に笑顔で、そこに色々な表情を加えていた感じでした。

先生が笑顔だから、子どもたちは安心して授業を受けることができます。

## ③指示、確認（褒める）の流れ

先生「（指示）教科書を出します。出せたら、「出せました」と言いましょう。」

子ども「出せました。」

先生「（確認）いいね。素晴らしいなあ。」

### 指示→確認→褒めるの流れが常に意識されていました。

昨年度来てくれた田村学氏もこの流れを意識することで、授業は改善すると講話の中で話していました。

話を聞いていない子も、友達の「出せました」の声で「まずい」と感じ、素早く準備していました。

## ④心地よいリズム

発問、指示など担任から発する言葉が、とても聞きやすいものでした。

話す調子が一定で聞きやすかったです。

なぜだろうと考えました。

すると、話す時のリズムが普段の会話の時と同じでした。

常日頃から聞きやすいリズムで話をされているのだと感じました。

## ⑤後ろの席まで通る声の大きさ

### 黒板の前で行なっている個別指導の声が、一番後ろの席まで聞こえてきました。

もちろんそこで個別指導されている子どもの声は聞こえません。

教室の後ろまで、小さな声でも、通る声で授業をしていました。

学級の中にいる子どもたちは、常に担任の声を意識することになります。

そうすることで常にクラス全体に声をかけるのと同じになり、落ち着いた学級へと繋がります。